

地中海世界における「古代」と「中世」

— 西洋史学と世界史教育のあいだ —

戸田善治 澤田典子

千葉大学・教育学部

“Antiquity” and “The Middle Ages” in the Mediterranean World

— Historical Research and World History Education —

TODA Yoshiharu SAWADA Noriko

Faculty of Education, Chiba University

本稿では、西洋史研究における地中海世界の「古代」から「中世」への転換点と、世界史教科書の内容構成及び記述におけるその比較検討を行った。西洋史研究においては、「古代」と「中世」、そして「古代」から「中世」への転換点をめぐっては、多様な議論が繰り返されてきた。また、現在発行されている6冊の世界史教科書における地中海世界の「古代」から「中世」への転換点に該当する部分を分析すると、3つに類型化することができ、その違いは、『平成21年版高等学校学習指導要領』の内容項目(3)イの「ビザンツ帝国と東ヨーロッパの動向、西ヨーロッパの封建社会の成立と変動に触れ、キリスト教とヨーロッパ世界の形成と展開の過程を把握させる。」という記述の後半部分を、「キリスト教とヨーロッパ世界の形成を把握させる」と解釈するか、「キリスト教とヨーロッパ世界の展開の過程を把握させる」と解釈するかによって生じることが明らかになった。

キーワード：地中海世界 (The Mediterranean World) 古代 (Antiquity) 中世 (The Middle Ages)
世界史教育 (World History Education) 世界史教科書 (Textbook of World History)

I. はじめに

戦後の我が国における高等学校の「社会科」の再編および「社会科」内の科目の再編に限定すると、その中心は「世界史」であった。「世界史」は、『昭和26年版中学校・高等学校学習指導要領・社会科篇Ⅲ (a) 日本史 (b) 世界史 (試案)』において制度的に誕生した。しかし、その理念・内容・方法等が具体的に記されておらず、教育現場は『昭和22年版学習指導要領東洋史編 (試案)』と『昭和22年版学習指導要領西洋史編 (試案)』に依拠せざるを得ず、単に「東洋史」と「西洋史」を合体させた観が否めなかった。

「一つの怪物が、1949年の日本に突如として現れた。社会科世界史という怪物が。文部官僚も、西洋史家も、はたまた日本史家もこの怪物の正体がつかめない。ましてこれと取り組む運命におかれている高等学校の教師と生徒にとっては、難解なるゴルギアス (原文ママ) の結び目のごとくである」。これは『世界史の可能性—理論と教育—』(尾鍋輝彦編, 東京大学共同組合出版部, 1950年) に登場する有名なフレーズであり、「世界史」の誕生に対する当時の歴史学界及び社会科教育学界の率直な反応を表現したものとして、世界史教育研究者が必ず引用してきた。

その約70年後まで「世界史」という科目は形を変えつつも存続し続け、今次高等学校学習指導要領の改訂に

よって、「世界史」関連として選択科目「世界史探究」、そして世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する必修科目「歴史総合」が誕生することとなった。

前述のように、高等学校に「地理歴史」が誕生して以来、「世界史」系の科目の再編では、近現代史を扱う科目の新設あるいは再編が中心であった。しかしながら、古代史・中世史は、昭和22年に設置された「東洋史」と「西洋史」から現行の「世界史B」そして次期学習指導要領の改訂によって設置される「世界史探究」に至るまで、その内容として継続的に位置づけられてきた。

本研究は、高等学校の科目「世界史」に関する、西洋史研究者と社会科教育研究者の共同研究である。本稿では、昭和26年度の学習指導要領の改訂によって誕生した科目「世界史」から現行の科目「世界史B」に至るまで、その内容として継続的に位置づけられてきた古代・中世の地中海世界に焦点を当て、西洋史研究における地中海世界の「古代」から「中世」への転換点と、世界史教科書の内容構成及び記述におけるその比較検討を行う。

(戸田善治)

II. 地中海世界における「古代」と「中世」

1. 「地中海世界」とはなにか

海としての地中海は、ヨーロッパ・アジア・アフリカの三大陸に取り囲まれた内海である。地中海を中心にその周辺地域も含む環地中海地域は、ほぼ全域が地中海性

気候に属し、晴天が続く高温で乾燥した夏と、雨季であるが気温は比較的高い冬に特徴づけられる。ナイル川を除いて大河はなく、海面は概ね穏やかである。こうした三大陸に囲まれた狭隘な地形と穏和な気候ゆえに航海のための好条件を備えた地中海は、人・モノ・文化・技術の最も頻繁で濃密な交流が見られた海と言われる。地中海には商人が取り結ぶ緊密なネットワークがはりめぐらされ、そうしたネットワークの結節点としての都市が環地中海地域の繁栄の基礎となった。ポール・ヴァレリーが「地中海はまさに一個の文明生産機械であった」（『精神の自由』）と述べたように¹⁾、古くから様々な民族や政治勢力が覇を競い合い、種々の異なる文化が接触する場となった地中海は、諸文明の発祥・交流・融合の舞台であり、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの三大一神教も、この環地中海地域で生まれた²⁾。

こうした地中海地域には気候や風土などの共通する特徴が見られるものの、当然のことながら、自然条件の共通性のみが「地中海世界」というひとつの世界をつくりあげるわけではない。自然環境や生態的条件が人々の生活様式や文化に一定の共通性をもたらすことは確かだが、ここで言う「歴史的世界」としての「地中海世界」は、旧版『岩波講座世界歴史』第1巻（1969年）の「総説」において太田秀通氏が述べているように、「自然や人間の生活様式の共通性を指標としてつくられた概念ではなく、地中海を媒介として歴史的に形成された現実的な関係、すなわち地中海をめぐる諸種族・諸民族・諸国家の抗争・競合および協調のうちに現実につくり出された、立体的な構造をもつ複合体³⁾」としての歴史的概念である。

そうした「歴史的世界」としての地中海世界の歴史を通観するならば、いくつの段階に区切るかは論者により多少差異があるものの、おおよそ次のような流れでとらえることができる（日本では、伊東俊太郎氏が「従来の西欧中心から自由に、あくまでも地中海そのものの現実に即して巨視的・全面的にとらえるひとつの時代区分」として提起した6区分〔『地中海小事典』エッセイ石油広報部、1986年〕がよく知られている⁴⁾）。前3000年頃、地中海の東岸にメソポタミアとエジプトを中心とする古代オリエント文明が成立し、フェニキア人などの活動を通して、その影響が地中海域各地に波及した。その後、オリエント文明の辺境にギリシア文明が生まれ、ミケーネ時代にはギリシア人の交易網は東地中海から地中海全域へと拡大し、前8世紀以降、数多くのギリシア植民市が地中海の沿岸に建設された。ヘレニズム時代には、アレクサンドロスが征服した東地中海地域にヘレニズム諸王国が興亡し、それらを支配下におさめたローマ帝国によって前1世紀末に地中海全域が単一の文明圏に統合され、地中海はローマ人の「我らの海（mare nostrum）」となるに至った。ローマ帝国は4世紀末に東西に分裂し、これがラテン・キリスト教文化圏とギリシア・ビザンツ文化圏の基本的な枠組みとなり、さらに7世紀のイスラームの出現以降、アラブ・イスラーム文化圏が成立して、環地中海地域には三つの文化圏が鼎立することになった。政治・経済・文化における一定の固有性・自立性を保つこれらの三文化圏は、15世紀半ばにビザンツ帝国が滅亡するまで存続し、その後の地中海は、キリスト

教勢力とイスラーム勢力がせめぎ合いと交流を繰り返しながら共存する場として特徴づけられる⁵⁾。

地中海世界を構造的に把握する試みとしては、古代における地中海世界の社会の特質を、都市が中心であること、都市は地中海沿岸に位置していたこと、都市の存立は奴隷労働にかかっていたことの3点に求めたマックス・ウェーバーの古代地中海世界論（1896年の「古代文化没落の社会的諸要因」において提示されたテーゼ）が知られるが、より俯瞰的な視点で地中海世界をとらえようとしたのが、ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌである。1937年刊行の遺著において古代世界の終焉と中世世界の形成を壮大なスケールで鮮やかに論じて一世を風靡した名高い「ピレンヌ・テーゼ」は、後述するように、その後の歴史研究にはかりしれない影響を与えた学説であるが、ピレンヌが古代から中世への移行を考える際に、7世紀に至るまでの地中海商業の継続と地中海を舞台とする古代世界の存続を重視し、地中海を西ローマ帝国が滅亡したあとも長く「ローマ的」であった文明の心臓部と見なしたことで、地中海世界の理解に新たな時間的・空間的広がりが増えることになった。さらに地中海世界の把握に大きなインパクトを与えたのが、1949年に刊行されたフェルナン・ブローデルの大著『フェリペ2世時代の地中海と地中海世界』（浜名優美訳『地中海』全5巻、藤原書店、1991-1995年）である。地理的環境や生態系を含めた地中海世界の全体的構造の叙述をめざし、有機的なまとまりとしての地中海の一体性を強調するブローデルの視座は、ラテン・キリスト教文化圏とアラブ・イスラーム文化圏の二大文化圏の対峙という二項対立的な地中海史像を修正するものである。

歴史上、その環地中海域全域を政治的に統合したのは、ローマ帝国において他にない。ローマ帝国の支配が「地中海世界」と呼びうるひとつの世界の秩序を初めてつくりあげ、そのローマ帝国の滅亡後は政治的統一体としての地中海世界は存在しなかった。それゆえ、「地中海世界=ローマ帝国」、もしくは「地中海世界=古代ギリシア・ローマ」という理解も、とりわけ日本においては根強い⁶⁾。先にも触れた旧版『岩波講座世界歴史』（全30巻）では、第1巻（古代1）のおよそ3分の1と第2巻（古代2）全体、第3巻（古代3）の冒頭が「地中海世界」にあてられており、その「地中海世界」の「総説」において、太田氏は先に引用したように「地中海世界」の概念を定義したのち、「地中海世界」は「ローマによる地中海周辺の諸地域の征服によって形成され」、「ローマ帝国の崩壊によってこの地中海世界は分裂し、ゲルマン諸族とイスラーム勢力の地中海域への進出によって崩壊した」と述べており⁷⁾、こうした理解が広く定着していったのである。また、古代ギリシア・ローマをさす「古典古代（Classical Antiquity, das klassische Altertum）」という言葉は、後述するように、ルネサンス期のヨーロッパ人が自らの文化的・精神的出自を古代ギリシア・ローマに求めたことに由来するもので、ヨーロッパ人のアイデンティティ確立にともなう強い価値意識に裏付けられた用語である。それゆえ、そうした特定の価値意識を含む「古典古代」という語の使用を避けようとする傾向からも、古代ギリシア・ローマを「地中海世界」「地中海文明圏」

と呼ぶのが慣例化し、「地中海世界」という言葉が「古代」という暗黙の前提で用いられてきた。1998年に刊行が開始された新版『岩波講座世界歴史』（全28巻）においては、第4巻『地中海世界と古典文明：前1500年－後4世紀』のみが「地中海世界」を表題にかかげ、それ以降の時代の地中海世界は、ほぼヨーロッパとイスラーム圏に分かれて扱われている⁸⁾。中世史家の齊藤寛海氏は、「古代地中海世界はおくとして、中世以降の地中海世界は、現在の歴史認識の水準では、自明のものとして存在するのではなく、研究者の意識的な問題関心によって浮上する、というのが実態である」と指摘している⁹⁾。

その「(古代の)地中海世界」はいかなる意味でひとつの歴史的世界としてとらえられるのかという問題をめぐる論争が、1960年代から1970年代にかけての日本の西洋古代史学界で繰り広げられている¹⁰⁾。古代に限定されているにしろ、地中海全体をひとつの構造をもつ世界としてとらえる包括的な理論構築をめざす議論が太田秀通氏や弓削達氏などの間で活発に交わされたことは意義深い。マルクス主義の立場から地中海世界を地中海周辺の諸種族・諸民族・諸国家の発展の不均等性・異質性によって形成された立体構造的複合体と見る太田氏¹¹⁾に対し、弓削氏は、地中海地域の基本的な社会を地中海独特の発展をする「市民共同体」という独自の概念でとらえ、地中海諸地域に散在する「市民共同体」の発展の均質性・等質性を強調し、この「市民共同体」の固有の運動法則が地中海全域をローマ帝国がひとつの歴史的世界に統一した原動力であると論じた¹²⁾。1980年代以降は、そうした地中海世界を全体として構想するような研究は生まれていない。これは、後述する「時代区分論」の議論がなされなくなったのと同様に、歴史研究者の研究テーマの細分化によりもはや「大きな物語」が関心と呼ばなくなったためと指摘されるが¹³⁾、こうした地中海世界の把握をめぐる活発な論争がその後の日本における西洋史研究の発展の重要な基礎になったのは確かである。「地中海世界という把握が妥当性をもつとするならば、それは、グローバルな世界史の中において如何なる位置をもつのか」¹⁴⁾。弓削氏が40年前の著書の冒頭でかかげたこの問いは、「大きな物語」の必要性がたびたび指摘される今、地中海諸地域を研究対象とする個々の歴史研究者が常に考えていかねばならない課題なのだろう。

日本において地中海を広い視野でとらえようとする動きとしては、1977年に発足した地中海学会の活動が知られる。地中海学会は地中海・環地中海地域を総合的に研究することをめざす学際的な学会で、同学会が総力をあわせて作成した『地中海事典』（三省堂、1996年）は、地中海に関する約450の項目を網羅した地中海世界の学際的入門書である。また、1999年から2003年にかけて刊行された全5巻の『地中海世界史』シリーズ（歴史学研究会編、青木書店）では、地中海世界の形成と展開の全体像を描くことをめざし、古代から現代に至る地中海諸地域を対象にした個別テーマが扱われている。さらに、国家を単位とする従来の歴史研究ではなく、国家の力が及ばない広域な空間である「海」を歴史研究の枠組みに設定し、「陸から、国家から」の視点から「海から、広域から」の視点への転換を促す「海域」研究においても、

地中海は格好の研究テーマである¹⁵⁾。「日本における海域世界史研究の金字塔」¹⁶⁾と評される家島彦一氏の著書『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史』（名古屋大学出版会、2006年）をはじめ、港町を軸に海域世界のネットワークを学際的に描き出すことをめざす全3巻の『シリーズ港町の歴史』（歴史学研究会編、青木書店、2005-2006年）や、2013年度歴史学研究会大会の合同部会「歴史のなかの海域—海がつなぐ／隔てる世界—」¹⁷⁾などでも、地中海のネットワークが盛んに論じられている。

なお、欧米においても、地中海世界全体を総体的に叙述しようとする歴史研究はブローデル以降殆ど現れていなかったが、近年、注目すべき研究成果があいついで刊行されている¹⁸⁾。2001年には、ブローデルが1969年に執筆した未刊行の遺稿『地中海の記憶—先史時代と古代』の英語版も出版された（尾河直哉訳、藤原書店、2008年）。とりわけ、イギリスの中世史家ペレグリン・ホーデンと古代ローマ史家ニコラス・パーセルの共同研究の成果である大著*The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History* (Oxford 2000) は、ミクロ生態学的手法で地中海の歴史を総体として把握しようとする試みで、多方面から注目を集めている¹⁹⁾。

2. 「古代」と「中世」

(1) 「古代」から「中世」への転換

伝統的な西洋史観では、その地中海世界を唯一、統一的支配圏にまとめあげたローマ帝国の「没落」「崩壊」が、「古代」の終焉、すなわち「古代」と「中世」の画期と見なされてきた。そうした見方において、ローマ帝国の「没落」、すなわち「古代」の終焉は、以下のように理解されてきた。3世紀の全般的な危機（「3世紀の危機」）を收拾したディオクレティアヌスとコンスタンティヌスの両帝によって専制的官僚国家（「強制国家」）として再建されたローマ帝国（後期ローマ帝国）は、一時安定を回復するものの、やがて内憂外患のなかで衰亡の一途をたどる。376年のゲルマン人の移動開始以降、ローマ帝国は「蛮族」の勢力伸長に悩まされて混迷の度を深め、395年には帝国が東西に分裂するに至った。その後、西半はゴート族やヴァンダル族の侵入があいつぐなかで著しく弱体化し、ついに476年、ゲルマン人傭兵隊長オドアケルによって最後の西ローマ皇帝が廃位され、西ローマ帝国は滅亡した。東半はそのちビザンツ帝国として独自の発展を遂げるが、西半はこうしてゲルマン人を主たる担い手とする中世ヨーロッパ世界へと移行した。

こうした見方は、ルネサンス期に成立した古代・中世・近代という三時代区分法に由来する²⁰⁾。自らの精神の源流を古代ギリシア・ローマに求めた15~16世紀の人文主義者たちは、古代ギリシア・ローマを「古典古代」と呼んで規範とした。彼らは自らの生きる時代を古典古代の復活・再生の時代と見なし、その二つの時代にはさまれた「中間の時代」を、古典古代の没落によって特徴づけられる「暗黒の中世」ととらえたのである。17世紀末には、ドイツの人文主義者ケラリウス（クリストファー・ケラー）が、337年のコンスタンティヌス帝の死までを古代、1453年のコンスタンティノープル陥落までを中世、

それ以降を近代とする時代区分を著書『世界史』（1685, 1688, 1696年）のなかで提示した。こうして、古代ギリシア・ローマにおいて花開いた人間性・理性を尊重する文化は、ゲルマン人とカトリック教会による支配のもとで潰え、1000年に及ぶ「暗黒の時代」を経て、ルネサンスに至って復活した、とするいわゆるルネサンス史観が歴史概念として一般化するようになった。18世紀の啓蒙主義時代には「暗黒の時代」としての中世の評価が一層強固に定着し、さらに19世紀半ば以降、こうした時代区分がマルクス主義の発展段階論と結びつき、古代奴隷制社会、中世封建制社会、近代資本制社会と規定され、歴史研究の共通認識として定着していったのである。

そもそも時代区分とは、単なる時期区分とは異なり、連続する歴史的時間を何らかの明確な指標によって区切り、意味づけるという主体的な営為である。何を指標にして区切るのか、特定の年代や事象で画期を明示することができるのか、という問題が常につきまとうが、近年の日本の歴史学界では時代区分をめぐる議論が殆ど見られないことがしばしば指摘されている²¹⁾。戦後日本の中国史研究においてとりわけ活発に展開された時代区分論争も1970年代以降はすっかり影をひそめ、日本の外国史研究の集大成と位置づけられる『岩波講座世界歴史』においても、1969年から刊行された旧版は古代・中世・近代・現代に区分されて編集されたのに対し、およそ30年後の1998年から刊行された新版ではそうした統一的な時代区分基準は設けられていない²²⁾（4世紀から10世紀までを時代枠とする第7巻『ヨーロッパの誕生』において、冒頭の「構造と展開」の章に「古代から中世へ」という表題が付されているが）。時代区分の議論がなされなくなった理由については、関心の拡散や研究テーマの細分化（いわゆる研究の「タコソバ化」）により、「大きな物語」に関わる歴史的思考と不可分のものとされる時代区分そのものが関心を集めなくなったことのみならず、ブローデルやミシェル・フーコーの影響から、時間の観念や認識の多様性が強調され、時代という概念や時代区分の客観性への懐疑が強まってきたことが指摘されている²³⁾。そうしたなかで、「古代」「中世」「近代」などが明確な意味内容をもつ概念ではなく、一種の便宜的な呼称として用いられているのが現状である。中世史家の江川温氏が指摘するように、「こうした区分が、伝統的な概念内容をあらかた失うことで、かえってニュートラルな約束事として多様な歴史像と共存しうものになった」²⁴⁾のである。

「古代」から「中世」への転換に話を戻すと、337年、376年、395年、476年などのいずれの年を画期とするにせよ、ローマ帝国の「衰亡」「崩壊」に関わるある特定の時点をもって「古典古代」が幕を下ろして「暗黒の中世」が始まったとするルネサンス以来の伝統的な時代区分をそのまま受容する歴史家は、もはや殆どいないと言ってよい。ローマ帝国が東西に二分された395年（帝権分裂の観点から実質的な東西分裂を364年と見る見解にせよ）にしても、最後の西ローマ皇帝が廃位された476年にしても、同時代人はなんら特別な意味を認めなかったであろう。かつて秀村欣二氏が「古代・中世境界論—学説史的展望」において強調したように²⁵⁾、「古代」と「中世」を特定の年代によって画することには慎重にならねばならない。

現在の大方の了解では、4世紀以降、ローマ帝国は地中海世界の統一を維持する力を失っていき、476年に西ローマ帝国が崩壊するが、その後も地中海を取りまく「ローマ的世界」のまともには維持された、とされる。ローマ帝国によって統一されていた古代地中海世界は長い時間をかけて7～8世紀に最終的に解体し、古代地中海世界の「周縁」のアルプス以北に、ギリシア・ローマ文明から多くの要素を継承する中世ヨーロッパ世界という新しい政治秩序が形成されていったとし、7世紀から8世紀にかけての時期に大きな構造変化と時代相の転換を見るのである。ルネサンス史観において「暗黒の時代」とされた「中世」の評価も、20世紀に入って大幅に見直されている。「古代」から「中世」への転換が漸次的な移行ととらえられるようになるのと同時に、「近代」は単なる「古代」の再生ではなく、「中世」からの継承であるとされ、「中世」は「近代」のヨーロッパ世界の基本構造が形成された時代と位置づけられるようになった。

以下では、上のような現在の理解がいかにして形づくられ、定着していったかを概観し、「古代」の「没落」「終焉」、そして「古代」から「中世」への歴史的転換という問題を探究することの意義を考える手がかりとしたい。

(2) ローマ帝国の「没落」—「古代」の終焉？

「古典古代」「暗黒の中世」という認識が生まれたルネサンス期以降、その輝かしい「古典古代」はなにゆえに「没落」「終焉」したのか、すなわち、ローマ帝国はなにゆえに「衰亡」したのか、という問題が盛んに論議されることになった。すでに4世紀から5世紀にかけてのローマ人の間にも、ゲルマン人の存在が脅威と感じられるようになるにつれ、「没落」をめぐる論議が見られたという。410年のゴート族によるローマ市掠奪はローマ人の危機意識を高揚させ、この「蛮族」による「永遠の都」ローマの蹂躪がアウグスティヌスの『神の国』の執筆動機となったと言われるが²⁶⁾、その後は、そうしたローマ帝国没落論はルネサンス期に至るまで展開されることはなかった。モンテスキューの『ローマ人盛衰原因論（原題：ローマ人の偉大さとその衰亡の原因考察）』（1734年）をはじめ、啓蒙主義時代にはローマ帝国の没落が盛んに論じられたが、そうした没落論の金字塔とも言えるのが、今なお世界中で読み継がれている18世紀イギリスの啓蒙思想家エドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』（1776-1788年）である。日本でも複数の全訳・編訳が刊行されているこの古典的名著において、ギボンは「世界史上で人類が最も幸福で繁栄した時期はいつかと問われれば、人は躊躇なくドミティアヌス帝の死からコンモドゥス帝の登位までの時期（「五賢帝時代」）をあげるであろう」と述べ、それ以後の時代を衰亡・没落の過程として描き出し、ローマ帝国を滅亡に至らしめた原因をゲルマン人による侵入・破壊とキリスト教に求めた。輝かしい文明を誇った巨大な帝国の不可避的な衰退を18世紀啓蒙人らしい倫理観で描くギボンのこの名著は、以後の後期ローマ帝国観にはかりしれない影響を与えた。

19世紀に近代歴史学が成立すると、今日のローマ史研究の基盤を築いたテオドル・モムゼンの大著『ローマの歴史』（1854-1856, 1885年）が、その後のローマ帝国没落史観を規定することになった。モムゼンは、アウ

グストゥス帝に始まる政治体制を「元首（プリンケプス）」と元老院との「二元政治体制」に基づく「元首政（プリンキパートゥス）」と呼び、他方、ディオクレティアヌス帝以降の政治体制を「専制君主政（ドミナートゥス）」と呼んで、3世紀以前とは全く異質な東方的な専制君主政体制ととらえた。共和政の伝統に対する専制という対比に根ざすこうしたモムゼンの「ドミナートゥス」観には、ルネサンス期以来の「古典古代」観のみならず、ビスマルク体制期を生き抜き、ビスマルクに頑強に抵抗した自由主義者たる彼自身の価値観が反映されていると言われる²⁷⁾。モムゼン以降のローマ史研究では、3世紀の内乱期を境に帝政期を前期・後期に二分する時期区分が定着し、帝政後期は476年の破局へと向かう「古典古代」の「衰退」「没落」の過程であるとする通説が形成されるに至った。

ローマ帝国の「衰退」「没落」の原因をめぐっては、その後の歴史研究のなかで実に様々な学説が提示されている。言うまでもなく、ローマ帝国がなぜ滅んだのか、というのは決して簡単に答えられる問いではないが、ローマ帝国外に原因を求める外因論の立場と、ローマ帝国が内部から弱体化したとする内因論の立場に大別される。フランスのアンドレ・ピガニオルが1947年の著書の結語として述べた「ローマ帝国は天寿を全うしたのではない。暗殺されたのである」という有名な言葉に象徴される外因論では、その暗殺の主犯は「蛮族」たるゲルマン人であり、ゲルマン人の侵入という外圧こそがローマ帝国の崩壊の主因であったとされる（気候変動などの天災説も外因論に含まれる）。これに対し、ローマ帝国内部に「衰退」「没落」の原因を見る内因論においては、ローマ帝国を「病死」「老衰死」させるに至った内部の病弊として、キリスト教会が優秀な人材を吸いあげたことによる人的資源の枯渇、人口の減少による労働力不足、属州地の自立による経済活動の衰退など、多様な要因が指摘されている。先に触れたウェーバーの古代地中海世界論も、拡大したローマ帝国が地中海から離れた地に都市をつくったために地中海を交易路とする利点を喪失し、以後帝国が縮小していく過程で奴隷の供給源や肥沃な土地などの帝国の基盤を次々と失って自滅した、と見なす点において、内因論の立場に立つ議論である。ギボンも『ローマ帝国衰亡史』においてローマ帝国の没落をもたらした12の要因を特定しているが、いずれにしても、単一の要因を特定することは不可能であり、無意味であろう。

このように、ローマ帝国没落原因論はまさに百花繚乱の観があるが、ローマ帝国の「衰亡」「没落」は、なぜかくも関心を集めるのか。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』は刊行以来二百数十年を経てもなお世界的ロングセラーとして読み継がれているし、ローマ帝国の衰亡をテーマにした書物は研究書・一般書を問わず数限りなく出版されている。日本でも、弓削達氏の『ローマはなぜ滅んだか』（講談社現代新書、1989年）が西洋古代史を扱った書物としては例外的にベストセラーとなった。こうした絶大な関心の背景には、これまで述べてきたようにローマ帝国の「衰亡」が「古典古代」の終焉や「古代」から「中世」への転換を考えるうえでの大問題であるということや、ひとつの文明や大国の「衰亡」というプロ

セスそのものが時代を超えて多くの人々の関心を惹起するテーマであるということのみならず、理念・イメージとしての「ローマ」「ローマ帝国」がもつ現代的意義も影響しているのだろう。広大な領土を征服して空前絶後の大帝国を打ち立て、それを長期にわたって維持するという世界史上比類なき偉業を成し遂げたローマは、普遍的・永続的支配の象徴となり、現代に至るまで様々な帝国の原型となっている²⁸⁾。800年にカール大帝が「ローマ皇帝」として戴冠し、そのカールの帝国の再興をめざしたナポレオンが凱旋門をはじめとする古代ローマ的なモニュメントを盛んに建立したことはよく知られている。アメリカ合衆国の建国もローマ帝国をひとつのモデルとしていたように、その後の歴史のなかで「ローマ」という伝統が柔軟に再構築されつつ継承されていったのである。

そうした特別な意味をもつ「ローマ帝国」の衰亡をめぐる考察は、上述の『ローマはなぜ滅んだか』において弓削氏が「いずれの没落原因論も、それぞれの論者の生きていた時代の、文明の先行き不安感を直接、間接に反映し、それへの処方箋の意味があった」と述べているように²⁹⁾、今という同時代を映し出す鏡であり、様々なローマ帝国没落論は歴史家自身の問題意識や同時代認識の投影としても理解することができる。ビスマルク体制下に生きたモムゼンの後期ローマ帝国観は彼自身の自由主義的立場を強く反映するものであったし、1918年にロシアから亡命した歴史家ミハイル・ロストフツェフは名著『ローマ帝国社会経済史』（1926年。坂口明訳、上・下、東洋経済新報社、2001年）において、内因論の立場から、自身が体験したロシア革命と重ね合わせてローマ帝国の衰亡を論じた。21世紀に入ってから、ローマ帝国の衰亡は、ローマ帝国の再来と見なされるEUの動揺と関連づけて論じられることも多い。

(3) 「古代」から「中世」への連続

18世紀以来こうした様々なローマ帝国没落原因論が展開される一方で、4～5世紀のゲルマン人の侵入と西ローマ帝国の滅亡を「古代」の終焉とはとらえず、「古代」から「中世」への連続的發展を強調する学説もある。オーストリアの歴史家アルフォンス・ドブシュは、第一次大戦後まもなく発表した『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎』（1918-1920年。野崎直治・石川操・中村宏訳、創文社、1980年）において、ゲルマン人を古代文化の破壊者ではなくローマ文化の担い手と見なし、古代文化はローマからゲルマンに継承されたとして「古代」から「中世」への連続性を説いた。このドブシュの古代文化連続説は、ゲルマン人の文化継承能力を論証することによって敗戦後のドイツ民族に自信を回復させることをめざしていたとも言われる。

先に触れたベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌも、同様に「古代」から「中世」への文化や経済の連続性を強調する。第一次大戦中にドイツ軍の捕虜となったピレンヌが収容所で執筆し、死後の1937年に出版された『マホメットとシャルルマーニュ』（増田四郎監修、中村宏・佐々木克巳訳『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ』創文社、1960年）において、彼は、ゲルマン人の侵入や西ローマ帝国の消滅は「古代」と「中世」を画する分水嶺をなすような事件ではなく、西

ローマ帝国が滅亡したのちも、地中海を母胎とする古代的な「ローマ世界」はイスラームの地中海進出とそれともなう地中海商業の途絶により地中海世界の統一性が破壊されるまで存続した、と主張した。ピレンヌは、7世紀のイスラームの進出によって西ヨーロッパが地中海から切り離されて内陸化したことで「古代」から「中世」への真の転換が生じ、そこで初めて中世ヨーロッパが誕生した、と見る。そして、キリスト教的西ヨーロッパ中世世界の成立を示すとされる800年のカール大帝（シャルルマーニュ）の戴冠を、イスラームによって古代地中海世界の一体性と秩序が破壊されたことの総決算としてとらえ、「マホメットなくしてシャルルマーニュなし」と説くのである。イスラーム勢力の地中海進出を中世ヨーロッパ世界形成の契機と見なすこの明快で革新的な「ピレンヌ・テーゼ」は、20世紀の歴史学まさに絶大な影響を及ぼしたが、学界に与えた衝撃が大きかっただけに批判も多く、現在に至るまで実証面において種々の反論を浴び、修正を余儀なくされている³⁰⁾。とりわけ、7世紀のイスラーム進出以前にすでに地中海世界の都市と交易網は衰退し、社会的・経済的な継続性は維持されていなかったことや、イスラーム勢力の地中海支配以降もキリスト教徒による地中海交易が持続していたことが考古学研究の立場から明らかにされている。

(4) 「古代末期」—「古代」でも「中世」でもない時代

こうした「古代」から「中世」への連続性を説く学説とは別の次元で、「衰退」「没落」という見方そのものを真っ向から否定しようとするのが、ピーター・ブラウンの「古代末期 (Late Antiquity)」概念である³¹⁾。中世史研究から出発したブラウンが1971年に刊行した『古代末期の世界』(宮島直機訳、刀水書房、2002年、改訂新版2006年)以降の幾多の著作において提唱しているこの新しい時代概念は、とりわけ英語圏を中心に有力な賛同者を得て、この数十年間、極めて大きな影響力をもっている。ブラウンは、ヨーロッパのみならず、メソポタミアからイラン、アフガニスタンまで含む広大な地域を対象とし、200年頃から700年頃までの時期(その後、250~800年頃に修正している)を、「古代末期」という、古代でも中世でもなく、古代の延長でも古代・中世の併存期でもない、独自の価値体系や社会規範、宗教観、文化形態をもつ固有の一時代として中立的にとらえた。従来の主たる研究対象であった政治体制や経済よりも文化や宗教、人々の心性や規範に重点を置き、人類学やジェンダー論などを積極的に援用する「古代末期」研究は、伝統的なローマ帝国衰亡史の文脈でこれまで「古典古代」の退化形態としてネガティブに語られてきたこの時代を「衰亡」「没落」という価値観から解放し、古代世界が長い時間をかけて根底から「変容」を遂げ、西ヨーロッパ・ビザンツ・イスラームという三つの世界が確立していく時代と位置づけた。こうして、ルネサンス期以来盛んに論議されてきた「ローマ帝国の衰亡」はもはや問題ではなくなり、「ローマ世界の変容」が重視されるようになったのである。

欧米の学界では、「古代末期」はすでに市民権を得た歴史概念であり、従来の歴史研究において「古代」から「中世」への単なる過渡期として古代史家からも中世

史家からも研究対象とされることの少なかったこの時代の研究は、西洋史研究のなかでも著しい活況を呈している分野のひとつとなっている。1990年代には中世史研究者と連携したヨーロッパ科学財団の学際的な共同研究プロジェクト「ローマ世界の変容 (Transformation of the Roman World)」が推進され、「古代末期」研究の専門誌もフランスやアメリカで創刊されるなど、めざましい研究の広がりを見せている³²⁾。

また、1990年代以降急速に進展している移動期のゲルマン人研究においては、ゲルマン人のローマへの適応能力を高く評価し、ゲルマン人をローマ帝国の破壊者ではなくローマ世界の継承者と見る見解が有力になっている³³⁾。ゲルマン人はローマ帝国にとって「脅威」ではなかったこと、ゲルマン人の侵入・定住は破壊的な行為ではなく、「順応」「同化」という平和的なプロセスであったことが強調され、ローマとゲルマン、文明と野蛮というかつての二項対立的な解釈は大きく見直されている。こうした新しいゲルマン人研究と歩調を合わせる「古代末期」研究においては、「蛮族たるゲルマン人が高度な文明を誇るローマ帝国を衰亡させ、古典古代が終焉した」という、ローマ帝国没落外因論のなかで盛んに語られてきた18世紀以来の理解は、根底から修正されるに至っている。中世史研究においても、ローマとの断絶を強調し、ゲルマン諸要素を重視して初期中世のヨーロッパ世界をとらえるゲルマニストの見解よりも、ローマとの連続性を基調として見るロマニストの見解が勢いを増している³⁴⁾。

1990年代後半になると、欧米では、「古代末期」研究に対する批判もあいつぐようになる³⁵⁾。「衰退」「没落」ではなく「変容」「継続」を重視する「古代末期」研究の隆盛のなかで「衰退」「没落」を問うことがいわばタブーとなったと評されるが、近年の研究には、そうした「古代末期」研究が忌避した「衰退」概念を再び強く打ち出す傾向が見られる。近年のゲルマン人研究における楽観主義的傾向にも批判が寄せられ、「新しいローマ帝国衰亡論」があいついで提起されている。なかでも、2005年に刊行されたイギリスの考古学者・歴史家ブライアン・ウォード＝パーキンズの『ローマ帝国の崩壊—文明が終わるとのこと』(南雲泰輔訳、白水社、2014年)は、「古代末期」研究と新しいゲルマン人研究に対するアンチテーゼとして、健全で強力であった後期ローマ帝国を蛮族たるゲルマン人が滅ぼし、それによってひとつの文明が崩壊したとする明確な外因論を考古資料から論じるものである³⁶⁾。ゲルマン人侵入後の帝国西半における経済の劇的な衰退・崩壊を強調し、「ローマ帝国の滅亡」こそが「ローマ世界の終焉」であると断ずるウォード＝パーキンズの主張は、ゲルマン人の侵入や西ローマ帝国の消滅の影響を過小評価し、ローマ的な世界の長期的な継続・変容を重視してきたピレンヌや「古代末期」研究の立場に対する真っ向からの反論として大きな反響を呼んでいる。

日本においては、1980年代から宗教史や女性史、心性史を中心に「古代末期」研究に取り組む研究者の層が厚みを増している。21世紀に入って、前述の『古代末期の世界』をはじめ、ブラウンの研究書の翻訳が続々と刊行され(『アウグスティヌス伝(上・下)』出村和彦訳、教

文館, 2004年。『古代から中世へ』後藤篤子編訳, 山川出版社, 2006年。『古代末期の形成』足立広明訳, 慶應義塾大学出版会, 2006年。『貧者を愛する者—古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生』戸田聡訳, 慶應義塾大学出版会, 2012年), フランスのベルトラン・ランソンのような英語圏以外の「古代末期」研究者の著書(『古代末期—ローマ世界の変容』大清水裕・瀧本みわ訳, 白水社, 2013年。原著1997年)や, 「古代末期」研究の重鎮の一人であるイギリスのジリアン・クラークによるコンパクトな「古代末期」研究の入門書³⁷⁾(『古代末期のローマ帝国—多文化の織りなす世界』足立広明訳, 白水社, 2015年。原著2011年)なども翻訳されて, 「古代末期」概念は今や広く浸透するに至っている。また, 中世史家の佐藤彰一氏は, ブラウンの「古代末期」論に与しつつも, 西ローマ皇帝政権の不在という事実を全く考慮することなしにこの時代の事象と構造を取り扱うのは非歴史的であるとし, 「古代末期」という主区分の下位区分として, 476年の西ローマ帝国の消滅から7世紀までを「ポスト・ローマ期」とする新しい時代区分を提唱している³⁸⁾。氏は, この期間の時代相を「ローマの文明を振り棄てるよりは, 遥かにローマの制度, 法, 文物, 習慣に執着し, 人々がほとんどローマのうちに生きていた時代」³⁹⁾ととらえている。

この10年ほどは, 日本においても, 欧米における潮流と同様, ローマ帝国の「衰亡」「没落」があらためて注目を集めるようになってきている。2008年5月の第58回日本西洋史学会大会(鳥根大学)では, 「西洋古代史における『衰退』の問題」と題するシンポジウムにおいて, 「古代末期」研究の動向と近年の批判を軸にローマ帝国の「衰亡」に関する議論が活発に交わされ⁴⁰⁾, 2009年11月の西洋史研究会大会(立教大学)では, 共通論題として「3世紀の『危機』再考」が取りあげられた(『西洋史研究』新輯39, 2010年)。2014年3月と2017年3月には, 南川高志氏を中心に, それぞれ京都大学とオクスフォード大学で, *New Approaches to the Later Roman Empire*, および *Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World*と題する, ローマ帝国の「衰退」の問題に取り組む国際カンファレンスが開催された。南川氏は, 2013年に刊行した『新・ローマ帝国衰亡史』(岩波新書)において氏独自の衰亡論も展開している。「ローマ帝国という政治的な枠組みの意義を重視」する氏は, 帝国の「中核」ではなく「辺境」から考察するという立場から, 4世紀後半の「排他的ローマ主義」の台頭によりこれまで帝国を統合してきた「ローマ人である」というアイデンティティが変質したことこそがローマ帝国の「衰亡」である, と説く。これも, 18世紀以来の衰亡論ともウォード=パーキンズのような「新しい衰亡論」とも異なる, ひとつの新たな衰亡論である。

21世紀の今, 「古代」の終焉をめぐる解釈は流動化を見せている, と言われる⁴¹⁾。つまるところ, それは, ローマ帝国の「衰亡」, 「古代」の終焉, そして「古代」から「中世」への転換というポレミックなテーマが, たえず議論を重ねて問い直していくべき歴史研究における極めて重要な問題であることの証でもあるのだろう。

(澤田典子)

Ⅲ. 「世界史」教科書にみられる地中海世界における「古代」から「中世」への転換点

『平成21年版高等学校学習指導要領』における「世界史B」の内容構成の特徴は, 世界の歴史の大きな枠組みと流れを「諸地域世界」の「形成」→「諸地域世界」の「交流と再編」→「諸地域世界」の「結合と変容」→「地球世界」の「形成」としてとらえている点である。この「諸地域世界」の「形成」は「古代」に, 「諸地域世界」の「交流と再編」は「中世」に該当する。

表1は, 各教科書の中世に該当する部分の章立てと, 「諸地域世界」の「形成」→「諸地域世界」の「交流と再編」という歴史の流れ, いわゆる「古代」から「中世」への転換点に該当する箇所の記述を抜粋したものである。これを地中海世界における「古代」から「中世」への転換点, という視点で解釈すると, 3つに整理することができる。第1のものは, 西ヨーロッパがラテン=カトリック圏あるいはローマ=カトリック圏, 東ヨーロッパがギリシア正教圏という政治的にも宗教的にも分離・独立した二つの宗教圏として成立したことをもって, 地中海世界からヨーロッパ世界へと再編されたと見なすものである。これを「東西ヨーロッパ世界=キリスト教圏形成」型と呼ぼう。この型には, 『世界史B』(実教出版), 『新詳世界史B』(帝国書院)が含まれる。この型の教科書記述では, 東西教会の対立, ローマ教会によるビザンツ帝国への対抗・離脱などがキーワードとなっている。第2のものは, 西ヨーロッパ世界が東ヨーロッパ世界から分離独立していくことをもって, 地中海世界からヨーロッパ世界へと再編されたと見なすものである。これを「西ヨーロッパ世界分離形成」型と呼ぼう。この型の教科書として, 「新選世界史B」(東京書籍), 『世界史B』(東京書籍)があげられる。この型の教科書記述では, 800年の「カールの戴冠」と西ヨーロッパ世界の形成を結びつけている点, 西ヨーロッパ世界がビザンツ帝国の政治的支配から分離独立したことに注目している点, 東ヨーロッパ世界についての説明は行うがその形成については十分に説明しない点, を特徴としてあげることができる。第3のものは, 地中海世界からヨーロッパ世界, あるいは東西ヨーロッパ世界への変遷していくありさま及びその変遷において歴史的意義を持つ歴史的事象を合わせて叙述していくことで, 地中海世界における「古代」から「中世」への転換を説明するものである。これを「ヨーロッパ世界変遷」型と呼ぼう。この型の教科書として, 『新世界史B』(山川出版社)があげられる。なお, 『詳説世界史B』(山川出版社)は, 「西ヨーロッパ世界分離形成」型と「ヨーロッパ世界変遷」型の両方の性格を有している。地中海世界からヨーロッパ世界への再編にとどまれば「西ヨーロッパ世界分離形成」型, それに「古代」から「中世」への転換を付加説明すると「ヨーロッパ世界変遷」型になる。

この3つの型は, 『平成21年版高等学校学習指導要領』の内容項目(3)イの「ビザンツ帝国と東ヨーロッパの動向, 西ヨーロッパの封建社会の成立と変動に触れ, キリスト教とヨーロッパ世界の形成と展開の過程を把握させる。」の後半部分の解釈の違いに依拠していよう。つま

表1 世界史教科書にみられる地中海世界の「古代」から「中世」への転換点

平成21年版高等学校 学習指導要領 「世界史B」内容項目	キリスト教とヨーロッパ世界の展開の過程			
	「東・西ヨーロッパ世界」の形成	「新遷世界史B」	「世界史B」	「詳説世界史B」
ア イスラーム世界の形成と展開 イ ヨーロッパ世界の形成と展開 ウ ビザンツ帝国と東ヨーロッパの動向 エ ヨーロッパ世界の形成と展開	第2部 諸地域世界の交流 第7章 ヨーロッパ世界の形成と展開 1 ラテン=カトリック圏の形成と展開 ゲルマン人国家の成立 フランク王国 修道院とローマ教会 726年にビザンツ皇帝レオ3世の発布した聖像禁止令は、ローマ=カトリック教会の反発をきよおこし、東西教会の対立を決定的にした。843年にこの禁止令はビザンツ帝国で廃止されるが、1054年に同教会は、互いに破門することによって分離した。こうしてヨーロッパ教会の公用語とするラテン=カトリック圏と、コンスタンティノールを中心とし、ギリシア語を公用語とするギリシア正教会の二つの宗教圏にわかれた。(p.132)	第2部 諸地域世界の交流と再編 第5章 ヨーロッパ世界の形成と変動 1 ビザンツ帝国と東ヨーロッパ世界 ビザンツ帝国 ビザンツの文化 スラブ人の動向 ロシアの発展 2 西ヨーロッパ世界の成立 ゲルマン人の大移動 フランクの発展 8世紀末にフランク王になったカール大帝は、800年にローマ教皇からローマ教皇の冠を受け、西ヨーロッパ全体の支配者となった。彼の帝国は今日のドイツ以西のヨーロッパ諸国をふくんでおり、ここにゲルマン人を支配者とし、ローマの伝統とキリスト教をとり入れた新しい西ヨーロッパ世界が生まれた。(p.88)	第2部 第5章 ヨーロッパ世界の形成と発展 1 西ヨーロッパ世界の成立 ゲルマン人の大移動 フランク王国の発展 ローマ=カトリック教会の成長 カール大帝 ここにおいてローマ教会は、ビザンツ皇帝に匹敵する政治的保護者として見出された。800年のクリスマスに、皇帝レオ3世はカールにローマ皇帝の帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言した。カールの戴冠は、西ヨーロッパ世界が政治的・文化的・宗教的に独立したという重要な歴史的意義をもつ。ローマ以来の古典古代文化、キリスト教、ゲルマン人が融合した西ヨーロッパ中世世界が、ここに誕生した。ローマ教会はビザンツ皇帝への従属から独立し、のち1054年にキリスト教世界は、教皇を首長とするローマ=カトリック教会と、ビザンツ皇帝を首長とするギリシア正教会の二つに完全に分裂した。	第2部 第9章 ヨーロッパ世界の形成と発展 1 古代から中世へ ヨーロッパの風土と地域 ゲルマン諸国家とフランク王国の台頭 東ローマ帝国の地中海支配 ローマ=カトリック教会の発展 2 カール大帝とヨーロッパ フランク王国の拡大と西ローマ皇帝位の復活 王位承認の見返りに、ビビンは756年、ランゴバルド王国から奪回したパヴェナ総督領を教皇に献上した(ピピンの寄進)。この領土が、教皇領の起源となった。ここに、教皇が王に権威を与え、王が教皇とキリスト教世界の防衛を引き受ける。西ヨーロッパ特有の総督領関係が築かれた。(中略)キリスト教の皇帝レオ3世が726年にキリスト教を掲げた画像の崇拝を禁じた聖像破壊令を発すると、聖画像崇拜修道士・聖職者が排除され、首都は混乱に陥った。聖像崇拝を奨励する立場のローマ教皇は、この事態をビザンツ皇帝権から離脱する好機ととらえた。799年、暴動のためローマを脱した教皇レオ3世は、アルパスをこえてフランク王カール1世に救援を求めた。翌800年のクリスマス、レオは軍を率いてローマ入りしたカールを、サン=エティオ大聖堂でローマ皇帝に戴冠した。ここに、ローマ帝国を公式に継承する二つの皇帝権力が、ヨーロッパの東西にわびつたこととなった。(pp.134-135)
	第2部 諸地域世界の交流 第8章 ヨーロッパ世界の形成 ヨーロッパ世界の風土 ゲルマン人からビザンツ帝国へ スラブ人の拡大とギリシア正教会の形成 ビザンツ皇帝は、スラブ人の諸国家を影響下に置くため、ギリシア正教会の宣教師を派遣し布教にあたらせた。宣教師たちはスラブ語を表記するために、ギリシア文字を考案し布教に用いた。その結果、9世紀後半にはセルビア人やバルガール人などがギリシア正教に改宗し、東ヨーロッパのキリスト教に中心にギリシア正教会が形成されていった。(p.91)	第2部 諸地域世界の交流と再編 第5章 ヨーロッパ世界の形成と変動 1 東ヨーロッパ世界 ビザンツ帝国 スラブ人の動向 ロシアの発展 2 西ヨーロッパ世界の成立 ゲルマン人の諸王国とフランク王国の初興 726年、ビザンツ皇帝レオ3世が偶像崇拝禁止令を出して干渉すると、ローマ教会はこれを退け、台頭しつつあるフランク王国と手を結ぶこととなる。これ以降、ビザンツ皇帝から自立して独自のキリスト教の西ヨーロッパ世界を形成しようとするローマ教会とフランク王国の動きが目立ってくる。とくに「ピピンの寄進」や「カールの戴冠」は大きな意義を持つことになる。(p.145)	第2部 第2編 広域世界の形成と交流 第9章 ヨーロッパ世界の形成 1 東ヨーロッパ世界 ビザンツ帝国 ビザンツの文化 スラブ人の動向 2 西ヨーロッパ世界の成立 ゲルマン人の諸王国とフランク王国の初興 フランク王国の分裂 西ヨーロッパ世界の融合 ローマ、ゲルマン、キリスト教の融合にもとづくものであり、その基礎はカール大帝の時代にすえられた。(p.146)	第2部 第5章 ヨーロッパ世界の形成と発展 1 古代から中世へ ヨーロッパの風土と地域 ゲルマン諸国家とフランク王国の台頭 東ローマ帝国の地中海支配 ローマ=カトリック教会の発展 カール大帝 ここにおいてローマ教会は、ビザンツ皇帝に匹敵する政治的保護者として見出された。800年のクリスマスに、皇帝レオ3世はカールにローマ皇帝の帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言した。カールの戴冠は、西ヨーロッパ世界が政治的・文化的・宗教的に独立したという重要な歴史的意義をもつ。ローマ以来の古典古代文化、キリスト教、ゲルマン人が融合した西ヨーロッパ中世世界が、ここに誕生した。ローマ教会はビザンツ皇帝への従属から独立し、のち1054年にキリスト教世界は、教皇を首長とするローマ=カトリック教会と、ビザンツ皇帝を首長とするギリシア正教会の二つに完全に分裂した。
ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界 エ 空間軸からみる諸地域世界	第2部 諸地域世界の交流 第7章 ヨーロッパ世界の形成と展開 1 ラテン=カトリック圏の形成と展開 ゲルマン人国家の成立 フランク王国 修道院とローマ教会 726年にビザンツ皇帝レオ3世の発布した聖像禁止令は、ローマ=カトリック教会の反発をきよおこし、東西教会の対立を決定的にした。843年にこの禁止令はビザンツ帝国で廃止されるが、1054年に同教会は、互いに破門することによって分離した。こうしてヨーロッパ教会の公用語とするラテン=カトリック圏と、コンスタンティノールを中心とし、ギリシア語を公用語とするギリシア正教会の二つの宗教圏にわかれた。(p.132)	第2部 諸地域世界の交流と再編 第5章 ヨーロッパ世界の形成と変動 1 東ヨーロッパ世界 ビザンツ帝国 スラブ人の動向 ロシアの発展 2 西ヨーロッパ世界の成立 ゲルマン人の諸王国とフランク王国の初興 726年、ビザンツ皇帝レオ3世が偶像崇拝禁止令を出して干渉すると、ローマ教会はこれを退け、台頭しつつあるフランク王国と手を結ぶこととなる。これ以降、ビザンツ皇帝から自立して独自のキリスト教の西ヨーロッパ世界を形成しようとするローマ教会とフランク王国の動きが目立ってくる。とくに「ピピンの寄進」や「カールの戴冠」は大きな意義を持つことになる。(p.145)	第2部 第5章 ヨーロッパ世界の形成と発展 1 西ヨーロッパ世界の成立 ゲルマン人の大移動 フランク王国の発展 ローマ=カトリック教会の成長 カール大帝 ここにおいてローマ教会は、ビザンツ皇帝に匹敵する政治的保護者として見出された。800年のクリスマスに、皇帝レオ3世はカールにローマ皇帝の帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言した。カールの戴冠は、西ヨーロッパ世界が政治的・文化的・宗教的に独立したという重要な歴史的意義をもつ。ローマ以来の古典古代文化、キリスト教、ゲルマン人が融合した西ヨーロッパ中世世界が、ここに誕生した。ローマ教会はビザンツ皇帝への従属から独立し、のち1054年にキリスト教世界は、教皇を首長とするローマ=カトリック教会と、ビザンツ皇帝を首長とするギリシア正教会の二つに完全に分裂した。	第2部 第9章 ヨーロッパ世界の形成と発展 1 古代から中世へ ヨーロッパの風土と地域 ゲルマン諸国家とフランク王国の台頭 東ローマ帝国の地中海支配 ローマ=カトリック教会の発展 カール大帝 ここにおいてローマ教会は、ビザンツ皇帝に匹敵する政治的保護者として見出された。800年のクリスマスに、皇帝レオ3世はカールにローマ皇帝の帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言した。カールの戴冠は、西ヨーロッパ世界が政治的・文化的・宗教的に独立したという重要な歴史的意義をもつ。ローマ以来の古典古代文化、キリスト教、ゲルマン人が融合した西ヨーロッパ中世世界が、ここに誕生した。ローマ教会はビザンツ皇帝への従属から独立し、のち1054年にキリスト教世界は、教皇を首長とするローマ=カトリック教会と、ビザンツ皇帝を首長とするギリシア正教会の二つに完全に分裂した。

り、「キリスト教とヨーロッパ世界の形成を把握させる」と解釈すれば、第1の類型である「東西ヨーロッパ世界＝キリスト教圏形成」型になり、「キリスト教とヨーロッパ世界の展開の過程を把握させる」と解釈すれば、第3の類型である「ヨーロッパ世界変遷」型になる。世界史教育として、諸地域世界の理解を相対的に重視するのか、通史的な歴史理解を相対的に重視するのか、教科書会社の依拠する世界史教育論によって教科書の内容構成と記述がなされていよう。(戸田善治)

IV. おわりに

西洋史研究における「古代」と「中世」、そして「古代」から「中世」への転換点に関しては、多様な議論が繰り返されておられ、今後も論争が続いていくであろう。また、世界史教育における「古代」と「中世」、そして「古代」から「中世」への転換点に関しても、世界史教育論としてのそれらの解釈は複数存在しており、諸地域世界の理解を重視する世界史教育論、通史的な歴史理解を重視する世界史教育論によって、「古代」あるいは「中世」という時代区分論が顕在化したり潜在化したりしていよう。

かつて、平成元年の高等学校学習指導要領の改訂をめぐって、総合的な教科である「社会科」を主張する社会科教育学界と「歴史独立論」を主張する歴史学界の対立があった。しかしながら、今次高等学校学習指導要領の改訂にさいし、「歴史基礎」の新設について、社会科教育学界の中から、特に世界史教育研究者の中から強い反対意見は聞かれない。世界史教育研究者は、新しい歴史学理論に基づき、新しい世界史教育理論を模索してきた⁴²⁾。今後は、「地中海世界」から「ヨーロッパ世界」へ、「古代」「中世」から「近世」「近現代」へと焦点を移し、共同研究を行う予定である。(戸田善治)

【参考文献】

- ・ Horden, P. & Purcell, N. (2000) *The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History*, Oxford.
- ・ Minamikawa, T. ed. (2015) *New Approaches to the Later Roman Empire*, Kyoto.
- ・ Ward-Perkins, B. (2005) *The Fall of Rome: And the End of Civilization*, Oxford (ブライアン・ウォード＝パーキンズ, 南雲泰輔訳『ローマ帝国の崩壊—文明が終わるといふこと』白水社, 2014).
- ・ 井上文則 (2009) 「ローマ帝国衰亡論の現在」南川 (2009) 63-67.
- ・ 江川温 (1999) 「中世ヨーロッパ世界」『西洋世界の歴史』(近藤和彦編, 山川出版社) 47-101.
- ・ 太田秀通 (1969) 「地中海世界 総説」『岩波講座世界歴史1』(岩波書店) 393-408.
- ・ 太田秀通 (1977) 『東地中海世界』岩波書店.
- ・ 大月康弘 (1998) 「ピレンヌ・テーゼとビザンツ帝国」『岩波講座世界歴史7』(岩波書店) 213-240.
- ・ 岡崎勝世 (2002) 「三区画法の現在」『歴史学における方法的転回』(歴史学研究会編, 青木書店) 91-106.
- ・ 加藤博 (1999) 「序」『ネットワークのなかの地中海 (地中海世界史3)』(歴史学研究会編, 青木書店) 13-28.
- ・ 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編 (2008) 『世界史をどう教えるか—歴史学の進展と教科書—』山川出版社.
- ・ 加納修 (2009) 「西欧中世初期史研究者から見た『ローマ帝国衰亡論』」南川 (2009) 67-69.
- ・ 樺山紘一編 (1989) 『現代歴史学の名著』中公新書.
- ・ 川勝平太編 (1996) 『海から見た歴史—ブローデル『地中海』を読む』藤原書店.
- ・ 岸本美緒 (1998) 「時代区分論」『岩波講座世界歴史1』(岩波書店) 15-36.
- ・ 岸本美緒 (2002) 「時代区分論の現在」『歴史学における方法的転回』(歴史学研究会編, 青木書店) 74-90.
- ・ 後藤篤子 (1998) 「古代末期のガリア社会」『岩波講座世界歴史7』(岩波書店) 159-186.
- ・ 後藤篤子 (2004) 「『ローマ理念』—訳者あとがきに代えて」『エドワード・ギボン 図説ローマ帝国衰亡史』(吉村忠典・後藤篤子訳, 東京書籍) 551-571.
- ・ 後藤篤子編訳 (2006) 『ピーター・ブラウン 古代から中世へ』山川出版社.
- ・ 齊藤寛海 (2001) 「地中海と地中海世界」『信州大学教育学部紀要』104, 87-96.
- ・ 佐藤彰一 (1998) 「古代から中世へ—ヨーロッパの誕生」『岩波講座世界歴史7』(岩波書店) 3-78.
- ・ 佐藤彰一 (2000) 『ポスト・ローマ期フランク史の研究』岩波書店.
- ・ 佐藤彰一 (2008) 「文庫版あとがき」『西ヨーロッパ世界の形成 (世界の歴史10)』(佐藤彰一・池上俊一, 中公文庫) 467-473.
- ・ 佐藤幸男 (2010) 「交流の結節点としての島」竹中・山辺・周藤 (2010) 264-270.
- ・ 高田良太 (2013) 「港湾都市カンディアからみた中世後期の東地中海」『歴史学研究』911, 160-168.
- ・ 高山博 (1998) 「地中海のノルマン人」『岩波講座世界歴史7』(岩波書店) 131-156.
- ・ 竹中克行・山辺規子・周藤芳幸編 (2010) 『地中海ヨーロッパ (朝倉世界地理講座7)』朝倉書店.
- ・ 冨井眞 (2015) 「書評: プライアン・ウォード＝パーキンズ著『ローマ帝国の崩壊』」『史林』98-3, 104-110.
- ・ 南雲泰輔 (2009) 「英米学界における『古代末期』研究の展開」『西洋古代史研究』9, 47-72.
- ・ 南雲泰輔 (2012a) 「ローマ帝国の東西分裂をめぐって—学説の現状と課題」『西洋古代史研究』12, 19-41.
- ・ 南雲泰輔 (2012b) 「書評: G. Clark, *Late Antiquity: A Very Short Introduction*」『西洋古代史研究』12, 55-61.
- ・ 南雲泰輔 (2013) 「古代地中海世界と日本」『古代文化』65, 93-106.
- ・ 二谷貞夫 (1988) 『世界史教育の研究』弘生書林.
- ・ 長谷川岳男 (2006) 「表象の帝国—ローマの『幻影』の起源」『幻影のローマ』(歴史学研究会編, 青木書店) 23-60.
- ・ 羽田正 (2007) 「書評: 家島彦一著『海域から見た歴史』」『東洋史研究』65-4, 83-93.

- ・秀村欣二 (1953) 「古代・中世世界論—学説史的展望」『東京大学教養学部人文科学科紀要』2 (『秀村欣二選集4』) 所収, キリスト教図書出版社, 2006).
- ・アンリ・ピレンヌほか (1975) 『古代から中世へ—ピレンヌ学説とその検討』佐々木克巳編訳, 創文社.
- ・星村平和 (1980) 「高等学校社会科『世界史』の変遷とその特色—昭和三五年版・四五年版を中心にして—」『社会科教育の理論』(社会認識教育学会編, ぎょうせい) 207-221.
- ・星村平和 (1980) 「『世界史』における文化圏学習」日本社会科教育研究会編『社会科研究』28, 20-28.
- ・星村平和 (1988) 「戦後における歴史研究の変遷と歴史教育—西洋史学の場合を中心に—」全国社会科教育学会編『社会科教育論叢』35, 13-23.
- ・星村平和 (1997) 『いまなぜ“新しい史観”か—世界史の窓から考える—』明治図書.
- ・松本宣郎・牟田口義郎 (1992) 『地中海』朝日新聞社.
- ・南川高志編 (2009) 「フォーラム:ローマ帝国の『衰亡』とは何か」『西洋史学』234, 61-73.
- ・南川高志 (2012) 「時代区分論と歴史学研究的現在」『史学雑誌』121-3, 35-37.
- ・南川高志 (2013) 『新・ローマ帝国衰亡史』岩波新書.
- ・宮崎正勝 (1992) 「世界史教育における『文化圏』について」日本社会科教育学会編『社会科教育研究』66, 55-70.
- ・向井朋生 (2013) 「地中海を舞台にした古代ローマ経済のグローバリゼーション」『歴史学研究』911, 151-160.
- ・森谷公俊 (2000) 「古代地中海世界への視角」『古代地中海世界の統一と変容 (地中海世界史1)』(歴史学研究会編, 青木書店) 17-22.
- ・森本芳樹 (1998) 「都市・農村関係論」『岩波講座世界歴史7』(岩波書店) 291-314.
- ・家島彦一 (1989) 「ピレンヌ・テーゼ再考—ムスリム勢力の地中海進出とその影響」『地中海世界と宗教』(坂口昂吉編, 慶應通信) 97-117.
- ・家島彦一 (2006) 『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会.
- ・安田元久 (1991) 『歴史教育と歴史学』山川出版社.
- ・安田喜憲 (2010) 「地中海文明の風土」竹中・山辺・周藤 (2010) 3-42.
- ・祐岡武志 (2017) 「世界史教育における内容編成の展望—学習指導要領『世界史』の現状と課題から—」『教科教育学研究の可能性を求めて』(原田・関・二井編, 風間書房) 239-248.
- ・弓削達 (1977) 『地中海世界とローマ帝国』岩波書店.
- ・弓削達編 (1979) 『地中海世界』有斐閣新書.
- ・弓削達 (1989) 『ローマはなぜ滅んだか』講談社現代新書.
- ・米田利浩 (1993) 「古代末期のギリシア文化」『ギリシア文化の遺産』(藤縄謙三編, 南窓社) 109-135.
- ・ジャック・ル＝ゴフ (2016) 『時代区分は本当に必要か?』菅沼潤訳, 藤原書店.
- ・渡辺節夫 (2006) 『フランスの中世社会』吉川弘文館.

【注】

- 1) 恒川邦夫訳『精神の危機 他十五篇』(岩波文庫, 2010) 235.
- 2) 安田 2010 : 3-8.
- 3) 太田 1969 : 393. Cf. 弓削 1977 : 5-8.
- 4) 松本・牟田口 1992 : 13, 144-145.
- 5) 松本・牟田口 1992 : 6-11 ; 高山 1998 : 133-136 ; 竹中・山辺・周藤 2010 : 57-113.
- 6) 弓削 1977 : v, 3, 1979 : 2 ; 松本・牟田口 1992 : 4.
- 7) 太田 1969 : 394. Cf. 弓削 1977 : 6-9.
- 8) 齊藤 2001 : 89.
- 9) 齊藤 2001 : 89-90.
- 10) 松本・牟田口 1992 : 14-15 ; 森谷 2000 : 17-19.
- 11) 太田 1969, 1977.
- 12) 弓削 1977, 1979 : 167-181.
- 13) 森谷 2000 : 19.
- 14) 弓削 1977 : 2.
- 15) 川勝 1996 ; 加藤 1999 : 15-17 ; 齊藤 2001 : 87-90.
- 16) 羽田 2007 : 86.
- 17) 向井 2013 ; 高田 2013.
- 18) E.g. D. Abulafia ed., *The Mediterranean in History*, Los Angeles 2003; W. Harris ed., *Rethinking the Mediterranean*, Oxford 2005; D. Abulafia, *The Great Sea: A Human History of the Mediterranean*, Oxford 2011. Cf. 南雲 2013 : 95-102.
- 19) 佐藤幸 2010 : 269 ; 南雲 2013 : 95-99.
- 20) 渡辺 2006 : 10-15 ; ル＝ゴフ 2016 : 30-38.
- 21) 岸本 1998 : 16-17 ; 南川 2012 : 36-37.
- 22) 岸本 1998 : 17-19 ; 岡崎 2002 : 95-98 ; 南川 2012 : 36.
- 23) 岸本 1998 : 16-17, 2002 : 74-79.
- 24) 江川 1999 : 47.
- 25) 秀村 1953.
- 26) 米田 1993 : 114-117.
- 27) 後藤 2006 : 12-13.
- 28) 後藤 2004 : 553-567 ; 長谷川 2006.
- 29) 弓削 1989 : 230-231.
- 30) ピレンヌ 1975 ; 家島 1989 ; 佐藤彰 1998 : 5-6 ; 森本 1998 : 292-294.
- 31) 後藤 2006 ; 南雲 2009, 2012a : 30-33.
- 32) 南川 2009 : 62 ; 加納 2009 ; 南雲 2009 : 64-65, 2012b.
- 33) 後藤 1998 ; 佐藤彰 2000 : 4-11 ; 井上 2009 : 65-66 ; ウォード＝パーキンズ 2014 : 26-32, 245-255.
- 34) 佐藤彰 2000 : 330, 2008 : 468-472.
- 35) 南川 2009 : 62 ; 井上 2009 ; 南雲 2009 : 55-60, 2012b.
- 36) 井上 2009 : 64-69 ; 富井 2015.
- 37) 南雲 2012b.
- 38) 佐藤彰 2000 : 1-26.
- 39) 佐藤彰 2000 : 24-25.
- 40) 南川 2009.
- 41) 南川 2009 : 62 ; 南雲 2009 : 60.
- 42) 宮崎 1992 ; 星村 1988, 1997